

第 167 回東邦医学会例会 予稿集

令和 8 年 2 月 16 日(月)

A. 柴田洋子奨学助成金受賞講演

1. Predicting Urosepsis in Ureteral Calculi: External Validation of Hu's Nomogram and Identification of Novel Risk Factors

杉崎 裕香 (東邦大学医学部泌尿器科学講座)

本研究は、急性結石性腎盂腎炎の中で敗血症発症リスクを予測する Hu のノモグラムの外部検証を行い、新規危険因子を特定した。東邦大学医療センター佐倉病院にて TUL を施行した 341 例中を対象とし、ノモグラムは AUC0.761 と良好な予測精度を示した。多変量解析では女性、ステロイド使用、血小板減少、CRP 高値、尿 WBC 陽性、結石 HU 低値、水腎症 HU 高値が独立因子であり、今後の追加検討が必要となる。

2. 高空間分解能および二重エネルギー選択機能を有するテルル化カドミウム検出器を用いたフォトンカウンティング X 線 CT

佐藤 二郎 (東邦大学医療センター大橋病院外科)

本研究ではフォトンカウンティング方式 CT を用いた Gd K-edge 強調 CT 撮影を実施した。CdTe フラットパネル検出器で取得した X 線画像から断層像を再構成し、50-100keV のエネルギー範囲で Gd K-edge CT を行った。低エネルギー CT と比較して筋肉・骨の信号は低下し、Gd 造影剤のコントラストが向上した。コーンビーム条件では実行画素サイズ $80 \times 80 \mu\text{m}$ で血管構造を高コントラストに描出できた。

B. 研修医発表

3. 脳ノカルジア症を契機に見つかったびまん性大細胞型 B 細胞リンパ腫の症例

瀬在 美月 (研修医)

指導：森 岳雄 (総合診療内科(感染症科))

土壌作業歴のある 60 歳代男性。全身性エリテマトーデスの既往があるが無治療で経過観察中であつた。意識障害と半盲を契機に脳膿瘍が判明し、質量分析にて *Nocardia asiatica* が疑われた。全身性リンパ節腫脹を認め、骨髄生検にてびまん性大細胞型 B 細胞リンパ腫と診断された。脳ノカルジア症は、細胞性免疫不全を伴わない症例では稀であり、本症例はノカルジア症が悪性腫瘍発見の契機となった貴重な一例である。

4. 多発性腎膿瘍に伴う敗血症の一例

阪本 大義（研修医）
指導：小松 史哉（総合診療内科）

36歳、女性の多発性腎膿瘍に伴う敗血症の一例を報告する。全身関節痛、発熱を主訴に前医受診され、前医で血圧の低下と血液検査にて炎症反応の上昇を認めたため当院に救急搬送された。各種検査施行し尿路感染症を契機とした腎膿瘍に加えてSOFA score 2点以上であることから敗血症と診断した。初期対応として、細胞外液、抗菌薬およびノルアドレナリンの投与を行った。尿培養より *Klebsiella pneumoniae* への感染が判明し抗菌薬の de-escalation を行った。

C. 研修医発表

5. 活動性甲状腺眼症に対しテプロツムマブを導入した一例

奥脇 瑠奈（研修医）
指導：松本 直（眼科）

近年、活動性甲状腺眼症に対し IGF-1 受容体阻害薬テプロツムマブが使用可能となった。従来治療により炎症の軽減は得られたものの、最重症例である視神経症へ進行した 50 代女性の活動性甲状腺眼症の一例を経験した。新規治療の導入により眼窩内環境の改善が得られ、視機能を温存し CAS および QOL の改善を認めた。他科連携のもと全身状態に留意しつつ治療を継続し、有効性が示唆された。

6. 両眼の内境界膜下出血をきたした Terson 症候群の一例

杉山 大剛（研修医）
指導：永田 有司（眼科）

現在、Terson 症候群に対する治療は保存的治療や硝子体手術が有効とされている。近年の疫学研究で 45 歳未満や出血後 3 ヶ月未満の Terson 症候群に対して手術を行うことが治療後の矯正視力を有意に改善させることが明らかになっている。今回、35 歳のくも膜下出血後に両眼に出血をきたした Terson 症候群に対して、右眼の硝子体手術を施行した。術後、矯正視力は 1.2 まで改善を認めた。

D. 一般演題

7. 緊急・災害医療に対する医師・医学生の意識と影響因子の検討

長谷川 智華（医学部法医学講座）

東邦大学の医師と医学生に対し、院外緊急医療や災害医療に対する意識調査を行った。3 病院の医師で、緊急医療および災害医療に自信があると回答したのは、それぞれ 23.2%、8%であった。災害医療支援活動への参加意思は 43~49%であった。医学生の 60%以上が災害医療に興味があるが、教育について医学生 73.3%、医師 54%が十分ではないと回答しており、今後、災害時に躊躇なく行動できる体制のために災害医療教育の充実が望まれる。

E. 大学院生研究発表

8. **胎児アシデミア予測のための分娩中の胎児ストレスの蓄積を考慮した新規 AI モデルの確立**

神谷 美緒（代謝機能制御系産科・婦人科学）
指導教授：中田 雅彦（産科婦人科学講座）

胎児心拍数陣痛図の胎児酸血症や出生児の脳性麻痺の発症予測における高い偽陽性率に対し、我々は先行研究で胎児ストレスの蓄積を評価する iPREFACE スコアを提案し、胎児酸血症の高い予測精度を報告した。さらに、予測精度の向上を目的に胎児ストレスの蓄積を評価する新たな AI 予測モデルを開発し、後方視的にその高い予測精度を証明した。今回、多施設前向き研究にて、AI 予測モデルの外的検証を実施したので報告する。

9. **表情筋運動における咀嚼筋の活動に関する電気生理学的検討**

花田 隼登（高次機能制御系形成外科学）
指導教授：荻野 晶弘（形成外科学講座）

我々は健常ボランティアに対して表面筋電図を用いてさまざまな表情における表筋筋（眼輪筋・大頬骨筋・口輪筋・口角下制筋）と咀嚼筋（側頭筋・咬筋）の活動を計測し、その関連性を検討した。不随意笑いを含めた表情運動においても咀嚼筋である側頭筋や咬筋の活動がみられたが、側頭筋と咬筋では軽微な相違が認められた。また、咬む際に大頬骨筋や口角下制筋が有意に収縮していることも確認された。

G. プロジェクト研究報告

11. **間質性肺疾患を合併した関節リウマチに対する抗リウマチ薬の有効性と安全性、呼吸機能変化への影響の検討（中間解析）**

山田 善登（東邦大学医学部内科学講座膠原病学分野（大森））

RA 治療は標準化が進む一方、ILD 合併 RA のエビデンスは乏しい。2023 年 4 月～2024 年 3 月に来院した RA-ILD46 例を後方視的に解析し、画像悪化に対するグルココルチコイド開始・増量を増悪と定義し評価した。増悪群は 29 例で、男性および上葉病変が多かったが、%FVC に差はなかった。MTX 使用率は同等で、長期治療例では増悪の有無にかかわらず呼吸機能は維持されていた。今後症例数を増やし、長期成績を明らかにする予定である。

12. **ST 上昇型心筋梗塞における Index of microcirculatory resistance を用いた冠微小循環障害改善の研究**

平野 正二郎（内科学講座・循環器内科学分野）

心筋梗塞患者に対する冠微小循環障害の評価は確立されていない。また、侵襲的評価における中期的変化を評価した報告はない。本研究では、ST 上昇型心筋梗塞患者における冠微小循環障害の変化を Index of microcirculatory resistance を用いて評価することとした。心筋梗塞発症 1 週間後と 6 か月後に冠微小循環障害を評価しそれらの予測因子に関して比較検討を行うこととした。

13. **がん精巣抗原を標的とした腫瘍関連抗体マーカーの開発**

梶原 庸司（消化器センター外科）

p53 抗体等の腫瘍関連抗体は陽性率の低さが課題である。本研究では、主要な固形癌の 80%以上で発現するがん精巣抗原 POTEE に着目し、768 例の血清解析を実施した。結果、POTEE 抗体の AUC は 0.74 と p53 抗体(0.68)に対し有意に高く、優れた診断精度を示した。がん早期診断や免疫チェックポイント阻害薬の効果予測・モニタリングへの活用が期待される。

令和 8 年 2 月 17 日(火)

J. 研修医発表

16. **持続する発熱の精査の結果、irAE 筋炎の診断となった 64 歳男性の一例**

飯田 英里（研修医）
指導：小松 史哉（総合診療内科）

尿管癌に対しペメトレキセド+エンホルツマブ ベドチン療法中の 64 歳男性が、持続する発熱を主訴に紹介された。感染症治療に反応せず、経過中の詳細な問診で大腿筋痛と嚥下困難感が判明し、MRI で筋炎所見を認めた。各種自己抗体は陰性であったが、免疫関連有害事象（irAE）筋炎と診断しステロイド治療を開始、速やかに解熱・症状改善を認めた。非特異的前駆症状に注意した問診の重要性を示す症例である。

17. **重度の粘膜症状を呈したマイコプラズマ感染症の一例**

阿部 航平（研修医）
指導：繁田 知之（総合診療内科）

近年、マイコプラズマ等の感染症を契機に発症する重症粘膜疹と薬物などを契機に発症する重症粘膜疹（SJS/TEN）を別疾患としてとらえる流れにある。今回マイコプラズマ感染症を契機に発症した重症粘膜疹の一例を通して上記 2 つの疾患の共通点、相違点を調査し前者では後者よりも軽症に終わることが多く予後も良いことが確認された。

18. **シクロスポリン腎障害を来した再生不良性貧血の 1 例**

櫻井 翔大（研修医）
指導：石原 晋（血液・腫瘍科）

60 代男性。汎血球減少を指摘され来院した。精査にて Stage4 の再生不良性貧血と診断した。シクロスポリン（CsA）と抗ヒト胸腺細胞免疫グロブリンからなる免疫抑制療法を開始後に急性腎障害を認めた。CsA 減量で腎障害が改善したことから同薬剤が原因と考えた。減量後は腎障害の再燃なく経過し、造血不全は改善した。腎障害は CsA の代表的な副作用であるが、適切に対応することで治療を継続することができた。

19. 発熱・倦怠感を契機に診断され、急速な腎機能悪化を呈した一例

小島 さや加（研修医）
指導：繁田 知之、鈴木 美音（総合診療内科）

症例は81歳女性、発熱および倦怠感を主訴に受診した。蛋白尿・血尿を認め、精査の結果、腎限局性顕微鏡的多発血管炎（MPA）の診断に至った。本症例を通じて、腎限局性MPAの臨床的特徴および治療について文献的考察を加えて報告する。

K. プロジェクト研究報告

20. 双胎間輸血症候群の受血児における右室流出路閉塞の検討

日根 幸太郎（新生児科）

双胎間輸血症候群（TTTS）に対する胎児鏡下胎盤血管吻合レーザー凝固術（FLP）を実施する患者における術後右室流出路狭窄の評価を行った。肺動脈狭窄を術前から認めた症例は、FLP後後も改善を認めなかった。機能的肺動脈閉鎖（fPA）を術前に認めていた症例は、生存例では全例改善を認めたが、一方で胎児死亡率も高かった。fPAを認める症例は迅速な胎児治療介入が必要である。

21. ビスホスホネート製剤投与下のグルココルチコイド誘発性骨粗鬆症に対する、ロモゾマブおよびデノスマブによる逐次療法の有効性の比較検討

川添 麻衣（内科学講座膠原病学分野）

本研究は、グルココルチコイド（GC）誘発性骨粗鬆症におけるビスホスホネート製剤（BP）の逐次療法としてのロモゾマブ（ROMO）の有効性を明らかにすることを目的とした。GCをプレドニゾン換算で2.5mg/日以上、6ヵ月以上投与され、かつBPを6ヵ月以上投与されているにも関わらず重症の骨粗鬆症を有する患者を対象とし、ROMOと、BPよりも強力な骨吸収抑制薬であるデノスマブの有効性を比較検討した。

22. 思春期の子どもの孤独感が自傷行為に及ぼす影響の検証：縦断研究

福屋 吉史（精神神経医学講座）

【目的】本邦の子どもの孤独感と自傷行為の関連について縦断的に検証した。【方法】10代前半の子どもの対象にした全国縦断調査のデータを用いて、孤独感と1年後の自傷行為との関連についてロジスティック回帰分析を行った。【結果】対象は940人で、自傷行為を認めた人は79人（8.4%）であった。孤独感と自傷行為に有意な関連（オッズ比：2.76；95%信頼区間：1.49-5.12）を認めた。【考察】孤独感と自傷行為と前向きな関連があることを実証した。

23. 強皮症の間質性肺炎における CD13/B1R の関与の解明

村岡 成 (内科学講座膠原病学分野)

強皮症に伴う間質性肺疾患 (SSc-ILD) における CD13 とその受容体、B1R の関与を解明することを目的とした。ブレオマイシン誘発間質性肺疾患より得た肺組織で CD13、B1R 発現が豊富に認められ、肺の細胞懸濁液において肺胞、間質マクロファージに CD13 の発現が促進していた。TGF β はマウス線維芽細胞の CD13、B1R 遺伝子発現を促進させた。さらに CD13 刺激はマウス線維芽細胞の *Acta2*、*Col1a* 発現を促進させた。以上より CD13/B1R が SSc-ILD の病態への関与が示唆された。

令和 8 年 2 月 18 日 (水)

M. プロジェクト研究報告

25. ヒトマクロファージの分極化におけるクロマチンリモデリング因子 (BRG1/BRM) による遺伝子発現制御機構の解析

山口 優也 (生理学講座細胞生理学分野)

マクロファージは環境刺激に応じて可塑的に炎症性と抗炎症性に分極化するが、その制御機構は不明な点がある。本研究ではクロマチンリモデリング複合体 BAF の機能を解析するため、BRG1 および BRM ノックダウン THP-1 細胞と BRG1/BRM に対する PROTAC (標的タンパク質分解誘導化合物) である AU-15330 を用いた。ノックダウン株では顕著な変化がみられなかったが、AU-15330 処理により M1/M2 関連遺伝子発現が低下した。現在、BAF 複合体の機能的関与をさらに検証中である。

26. induced microglia-like cell を用いた筋萎縮性側索硬化症における神経炎症の解析と早期診断バイオマーカーの確立

渋川 茉莉 (内科学講座神経内科学分野(大森))

筋萎縮性側索硬化症をはじめとした神経変性疾患の病態には活性化グリア細胞による神経炎症の関与が示唆されている。ヒト末梢血単球から作製した induced microglia-like cell (iMG 細胞) は、ミクログリアの特性を持ち、*in vitro* での解析ツールとして注目されている。本研究では iMG 細胞の機能評価系を確立し、iMG 細胞がミクログリアと同様の遺伝子発現パターンを示すことを確認した。現在、患者由来の iMG 細胞を用いて疾患特異的な遺伝子発現の解析を進めている。

N. プロジェクト研究報告

27. AYA 世代のスマートフォン依存における起床困難に関する要因の多変量解析モデルによる検討

田形 弘実（精神神経医学講座）

AYA(Adolescent and Young Adult：思春期・若年成人期)世代の睡眠障害は起床困難が特徴的であり不登校など社会生活に及ぼす影響は大きい。またスマートフォン依存は起床困難との関連が報告されている。本研究は、スマートフォン依存を有する AYA 世代の睡眠障害患者を対象として、起床困難に関連する主観的および客観的睡眠、うつ症状、社会機能、内服等の影響について検討するものである。

28. 関節リウマチの精密医療に向けた治療戦略に関する研究

脇谷 理沙（東邦大学医学部内科学講座膠原病学分野）

高齢発症関節リウマチでは早期から高疾患活動性（HDA）の症例が存在し、加齢関連リンパ球の関与が疑われる。関節リウマチ患者の加齢関連リンパ球サブセットを解析したところ、HDA 患者では CD4+T 細胞中の ThA の頻度が有意に高く、ABC や TEMRA には差を認めなかった。短期間で悪化する関節リウマチの病態に ThA が関与している可能性が示唆された。

29. II型肺胞上皮細胞の細胞老化と SASP 因子を標的とした間質性肺疾患治療の探索

古川 果林（東邦大学医学部内科学講座膠原病学分野）

間質性肺疾患（ILD）における II 型肺胞上皮細胞（AT2）の細胞老化の関与を検討するため、ブレオマイシン誘導性 ILD モデルにおける AT2 の RNA-seq を行った。肺線維化の初期と慢性期に共通して p53-p21 経路の関連遺伝子の発現が上昇すると同時に、I 型インターフェロン（IFN-I）関連遺伝子の発現が肺線維化初期に上昇していた。AT2 の細胞老化と IFN-I 経路を介した炎症の関与が示唆された。

P. 研修医発表

31. Capivasertib 導入初期に発症した重症 DKA の 1 例

細田 俊太郎（研修医）
指導：齊藤 芙美（乳腺・内分泌外科）

AKT 阻害薬である Capivasertib は、ホルモン陽性 HER2 陰性進行・再発乳癌に対する新規治療選択肢として期待される一方、インスリン作用障害を介して高血糖や糖尿病性 ケトアシドーシス（DKA）の発症がされている。今回、Capivasertib 投与初期の重症 DKA を経験したので報告する。

32. 高血圧緊急症に血栓性微小血管症(TMA)が合併した一例

齊藤 茉莉子 (研修医)
指導：小松 史哉 (総合診療内科)

高血圧緊急症を契機に腎障害・溶血性貧血・血小板減少が急速に進行し、二次性血栓性微小血管症(TMA)を合併した1例。過度の高血圧による血管内皮障害が重症化の主因と考えられた。本症例は高血圧緊急症におけるTMA併発の重要性と、迅速な臓器障害評価の必要性を示唆した。

33. 高尿酸血症の2例

大堀 耕資 (研修医)
指導：繁田 知之 (総合診療内科)

本発表では高尿酸血症・痛風の2症例を通じ、急性発作期および寛解期における治療方針を検討した。急性期にはNSAIDsまたはコルヒチンによる速やかな炎症制御を行い、発作消失後に尿酸降下薬を導入することの重要性を示した。さらに病型分類に基づく薬剤選択、腎機能や併存疾患を考慮した治療調整、生活習慣病指導を含めた包括的管理の有用性を報告する。